

フラッシュ工房

発売開始日 97年

販売終了日 14年

当時の記事(97年8月号)

「フラッシュ工房」は印章店が自社で浸透印を作る機械。浸透素材を熱によつて溶かし、インクの浸出をコントロールして印面を複製する方式で、「本格的」な浸透印製造システム。

作業手順は次の通り。まず原稿は製版されたネガもしくはポジフィルムが必要となる。

①ネガフィルムを「フラッシュ工房」本体にセットする(ポジフィルムの場合は特殊カーボン紙を重ねる)。

②ホルダーつき印面(フラット素材)をその上に重ね、圧着装置で固定する。

③扉を閉じ、スイッチを押して10数回フラッシュさせる(1分程度・自動)。

と、たったこれだけの作業。場合によっては縁の部分の製版を再度おこなう必要があるが、①②③の作業を繰り返すだけなので、その作業を含めても1個作るのに5分も掛からない時間

だ。あとは好みの色のインキ(不減インキも使用可能)を注入し、1〜2時間おいて完成となる。

「フラッシュ工房」のその早さの秘密は印面の素材と熱フラッシュする本体にある。

この印面素材は元々表面からインキが浸透する状態にあるのを、フラッシュで熱を与えることによつて素材の特性が変化するので活かしている。従来の浸透印のように印面素材そのものに浸透性があるのではなく、印刷という孔版と同じ。つまり熱処理によつて不必要な部分の浸透する状態を塞ぎ、文字になる部分だけにインキが染み出てきて印影を形成する原理だ。

驚くのは35万円という本体価格。浸透印を製造する方法としては破格と言えるだろう。現在、浸透印を製造する機器として最も注目されているレーザー彫刻機でも最低500万円(97年当時)はすることからみても革命的な存在だ。

その後、商品は怎么样了？

97年、各種の展示会でデビューし、「低投資で浸透印を複製できる」と印章業界の脚光を浴びた。その後、フラッシュ工房は2号機、3号機とバージョンアップを繰り返して、累計約800台を販売。定番の浸透印複製システムとして印章店に支持されたが、14年に販売を終了。17年間の歴史にピリオドを打った。

ちなみに、その他の「工房シリーズ」(サーマル工房、ネーム工房)も販売を終了したが、ホルダーやインクなどの部材は現在も継続して販売している。
(一部廃盤もあります)